INTERVIEW: インタビュー

元プロ陸上選手

為末 大去

400m ハードルの日本記録保持者であり世界陸上選手権で2度銅メダルを獲得し、陸上競技引退後は、書籍、SNS、テレビのコメンテーターとして様々な情報を発信し、最近ではテレビCMで俳優としての活動もされるなど幅広い分野で活躍を続けている為末大さん。

「考え」「議論」をすることを大切にし、スポーツに限らず情報発信をしている為末さんに、スポーツ界のこと、ビジネスのこと、そして司法等について語っていただきました。

(聞き手・構成:高橋辰三,神原あゆみ,小峯健介)



――為末さんといえばハードルの現役時代から情報発信をされていたイメージがありますが、アスリートが情報を発信するということについての思いをお聞かせください。

僕はアスリートが発信するということはすごく意味があると思っていて、なかなかできない経験をしてきた人の話を聞きたいという人は多いと思うんです。僕はアスリートに社会で役割があるというのは、現役中だけじゃなく、引退後もその体験を語るということも含めてだと思っています。そこをアスリートは意識をして、何か社会に還元するということをした方が、結果的にアスリートは社会から尊敬されて、それに憧れる子どもたちが増えて、スポーツ界全体も回る、そういうことをすべきかなと思っています。

そのためには、もう少しアスリートたちは意見を発して、かつ、できればスポーツ界もそういう自分の意見を言うようなアスリートに寛容であってほしいと思います。

――為末さんは今, テレビのコメンテーターとしてもご活躍ですが, 現役を引退したら, このようなコメンテーター

とか、その他今現在やっていることをするだろうなという 予想はしていましたか。

全然していなかったですね。僕はビジネスをしたいなとずっと思っていたので、何となく事業をしているというイメージがあったんですけど。ただ、テレビの世界にそんなに僕のニーズがあると思っていなかったので、それはそれで予想外ではあるんですけど。ただ、現役を引退するときに僕がやりたかった方向とはちょっと違うところに今、いますかね。

――テレビのワイドショーとかニュース番組にも出ていらっしゃるので、本当にいろいろな問題が出てくると思いますが、テレビでコメントするにあたって、下準備、もしくは、心構えなどはありますか。

僕に知識は期待されていないなというのが分かったので、もう調べないというふうに決めました。少し事実関係とかを調べたりはありますけど。僕の役割は何なのかというと、この問題の背景がどうなっているかなんて別に誰も僕に期待していなくて、見方が変わるということを期待しているんだと思うんです。

実はコメンテーターで呼ばれる最初のきっかけになったのは、都知事選でいろいろな都知事候補者が来られたとき、東京オリンピックにどうやって取り組むんですかということとか、ばーっと質問が相次いだときに、僕が東京オリンピックが終わった後にどうするんですかと言ったときに、みんながびたっと止まったという瞬間があったんです。

例えば、2020年以降も2020年までにつくったものを使うわけじゃないですか。だから、そこを想定すると一体どういうものをつくるべきなんだろうとか。無邪気に素直に思ったことを言うということで、ちょっと見方が変わるということをたぶん期待されているのではないでしょうか。

― 2020年に東京オリンピックの開催が決まって、期待 することはありますか。

僕は、2020年以降に日本社会が抱えるであろう高齢化や地方の問題などを、オリンピック、パラリンピックという一大イベントをきっかけにして、2020年以降、日本社会をどうつくっていくのかと考える視点が非常に重要だと思っています。

もう1つは、健康や人間の幸福感は、最後、コミュニケーションに行き着くことがすごく多いんですね。 なので、コミュニケーションが円滑になるような社会 をつくっていくためにスポーツをうまく使えないかと いうのは思っています。

例えば、ヨーロッパには、スポーツをしない人も結構 入っているスポーツクラブがあるんです。 そこには、 バーとかカフェとかがあって、 そこに行ってはコミュ ニケーションをとって帰っていく第3の場所になって いるんです。

そういうものを日本の、特に地方に作って、一人 暮らしの高齢者たちにも日常から連絡が取りやすくなっていくような、そういうコミュニティーを作るために スポーツを利用することができればいいなと思います。

――現代人は運動不足だといわれていて、弁護士は特に

働き過ぎの傾向があると思うのですが、それでも体の感覚 とうまく付き合っていくために日常的に意識すべきことと いうのは何かありますか。

歩行は人間にとって最も大きな運動なんだと思います。だから、一駅分歩いていただくとか、歩行をなるべくするというのは1つすごく簡単なことであると思います。僕は現役中に自分の身体と自分の心とか頭との関係にすごく興味がわいたんです。それは、認知心理学の領域なのですが、例えば、人間が笑顔になる条件で調べていくと、2番目か3番目につられ笑いが出てくるんです。自分の自発的な感情がどこから来るのかすごく興味があります。

僕が現役時代に思ったことは、全部自分の頭と心から発するんじゃなくて、体からアプローチして自分の頭とか体に影響を与えることは可能じゃないかと。だから、怒っていたら、それをどう鎮めるか考える前に椅子に座っちゃえとか。そうすると実際に怒りが鎮まるといわれていて、そういうのは結構面白いかなと思います。

――為末さんは「『遊ぶ』が勝ち」(中公新書ラクレ)という ご著書も出されていますが、運動のみならず仕事において 遊びの感覚を失わないために意識できることはありますか。

職業にもよるとは思いますが、結局、遊びって何なのかというと、何かを思い付くこととそのアイデアを試してみて、それによるフィードバックがあってから考えること、そのPDCAサイクル(計画(Plan)、実行(Do)、評価(Check)、改善(Act))みたいなことだと思います。その実験する感覚が重要だと思うんです。

僕の会社の仕事でも、試してみるということの奨励をするようにしています。だから、打ち合わせでも1時間の日と15分の日と30分の日とでどれが一番よかったかとか、座る椅子の場所を変えてみるとか、試してみることを勧めています。人間はルーティン化すると気が付かない間に遊ばなくなっていくと思うので、いかにいつもと違う状況を組み込むかというのはすごく大事にしています。

― ハードル競技は個人競技であり、自分との戦いだと ご説明されていますけれども、自問自答を繰り返して試行 錯誤していく過程で人に意見を聞くタイミングというのは どうお考えですか。

非常に難しいですよね。僕はコーチを付けないで やっていたんですけど、やっぱり苦しいときにアドバ イスを聞くんですよ。一番難しい点は、栄養士の人 に聞くとそれは栄養の問題だと、心理学の人に聞く とそれはメンタルの問題だと、コーチに聞くとそれは お前の問題だと言うんです。要は、それぞれ本業の アドバイスなんですよね。

結局、取捨選択するのは自分じゃなきゃいけない わけで。だから、アドバイスを聞いて、最大の問題と いうのは誰の話を聞かないかということだと思います。 私はある程度人で絞り込んで、本当のことを言いそう な人のアドバイスを聞いていました。

――コメンテーターとは別に「為末大学」という、議論を することにかかわるイベントの取り組みもされていますが、 そのきっかけなどは何ですか。

アメリカにいたときにすごく感じたんですよね。アメリカに感化されて日本に帰ってきて、思ったことを言うようになったら波風立っちゃったみたいな経験があって、何でこれはだめなんだろうって。平気で「原発はあった方がいいの、ない方がいいの?」と言われたりするんですよ。少しでも答えに詰まったら詰まったで、もうすぐに次の人に質問がいってということを。僕は原爆のことを聞かれてびっくりしたんです。原爆に対して、「どう?」「アメリカに怒っているの、怒っていないの?」って。決めておかなきゃいけないんですね、そのときの自分の位置を。それなりのロジックで。

――日本がアメリカのように訴訟が多くなるような社会に 近づくのかどうかという話題がありますが、司法について 考えていることはありますか。

どうしようもない局面ってあると思うんです。最後、

結局, (専門家に) 投げなきゃいけない局面というのが。自分たちだけじゃ決められないから, どこかに持ち込んで決めるということは必要だと思うんですけど, アメリカみたいにはならないにしても, どこかで日本社会の中でもうまく折り合う場所というのは出てくるんじゃないかと思うんです。

だから、今の方向であれば歓迎すべき方向じゃないかと思いますが、もう少し法律家の人たちが社会の中に入っていく方向で。例えば、スポーツの選手選考でよく出てくるんです。日本一になったんだけど、オリンピック選考に外れたというのが。昔の選手はそれは協会の判断ですからというので終わっていたのが、今は明確な理由は何なのかを開示を求めるという例は出てきているので、僕はこれはスポーツ選手の自立の上では大事なことだと思うんですけど。ただ、これがいちゃもんみたいにあちこちに増えていくと、結構それはそれで生きづらいなと思うので、いいバランスというのを日本社会の中で見つけていけるんじゃないかと思うんですけどね。

――最近、スポーツ界の問題点をマスコミなり、選手なりが発信して、世の中で意見が出てくることがあります。 あのような一般の意見のスポーツ界への影響について、 感じられることはありますか。

子どものときに、30年ぐらい前ですかね、父親に連れられて広島の会社に行って、納会というのに出たんです。そのときの空気がスポーツ界の空気そのまんまなんです。特にスポーツ界が特殊じゃないんですけど、ただ、30年前の日本社会を反映していて、女性社員の方たちが奥にいて、男性は真ん中で堂々と女性がお茶をくむのを待っていて。

スポーツ界ってある種, 聖域的なところがあって, スポーツの社会は一般社会とは違うんだみたいにやっていたんですけど, 普通の社会のコンプライアンスとかが持ち込まれ始めたら, 協会の方でやっていたなあなあなところが全部浮き出てきちゃって非常に 戸惑っていると。僕はいい傾向だと思うんですよね。

INTERVIEW: インタビュー

健康や人間の幸福感は、最後、コミュニケーションに行き着くことが多い。なので、コミュニケーションが円滑になるような社会をつくっていくためにスポーツをうまく使えないかと思っています。

為末 大

結局、そうならざるを得ないところがあると思うので、 それをいかにやっていくかという点ではいいなと思う んです。

ただ、一番の問題は、いまだにあるんですけど、選手がスポーツの問題について発言すると、だいたいその選手の引退後もそのスポーツの世界なんです。そこで不利を被るから、現役時代に何も言えないという構図があるんですけど、これは変えるべきだと思います。選手が中心なので、選手たちから自分の意見が出て、それらが反映された組織運営がされるべきだと思うんです。ちょっとまだそこがグレーになっている感じがします。

一一今, 弁護士は, 東京だけでも1万5,000人以上いて, この数年でかなり増えてきており, 競争というものも当然 出てきているんですけれども, その中で生き残っていく, または, 必要とされる弁護士には何が求められているとお考えですか。

本当に僕は何も分からないのですが、でも、最近は、昔はよく分からない堅い世界だと思ってきたのが少しずつ分かってきました。ちなみにうちの会社なんかでいくと、自分の肖像に関することというのがよく分からないので相談したいとかありますけど、法律のことで困っている人は結構いると思うんです。簡単に相談できて、いい人に当たるシステムってないかなというのはいつも思うんですけどね。

もう1つは、その問題って法律の問題ですよとい

うことだと知らずにやっていることが結構あったりするので、それを指摘するところまでケアしてくれると 非常にうれしい感じがしますね。いろいろなことをやっていて困っているんだけど、それは法律で解決できますよというところまで、簡単に言うと、お客さんというイメージですかね。クライアントのニーズを拾って、そこに対してうまく適応していくというのはどの商売でも大事なことだと。

話は変わりますが、ITの世界が入ってきた後の職業の変化がどうなるのかについてすごく興味があります。会計士さんとかはもう戦々恐々としていて、どこでバリューを出すかというのは重要な点だと思います。中には、スポーツのコーチもかなりITの力でできるんじゃないかと言っている人や、コーチは無理にしても、どの選手を選ぶかITの力でできるようになるんじゃないかと言っている人もいます。どの世界もITが来たときに自分がどう変化すればいいのか困っている気がします。

---**本日はどうもありがとうございました**。

プロフィール ためすえ・だい

スプリント競技における日本初の世界大会メダリスト。五輪はシドニー、アテネ、北京の3大会に連続出場。2012年に現役を引退。 執筆、テレビ出演等多方面でスポーツと社会についての活動を広げている。競技に打ち込む独自のスタイルと自分を見つめて思索する姿が感銘を呼び、「走る哲学者」と言われている。